

「スタンダードテキスト 腹腔鏡下外科手術

Surgical Laparoscopy

Karl A. Zucker 編

出 月 康 夫 監訳
万 代 恭 嗣

北里大学教授・外科

比 企 能 樹

Zucker の名前は、腹腔鏡下手術を行っている日本の外科医の間では、知らない人はない。私は久留米（第3回内視鏡下外科手術研究会）で掛川暉夫会長に紹介されて初めて彼と直接話をする機会を与えられた。彼は、腹腔鏡下手術は一般外科の劇的な変革であるとまで主張した。彼の意見に私が同意し、彼が本物であると判断した裏には次のようなやりとりがあった。つまり、この手術を行うにあたって、臨床応用の際には必ず新しい術式のための原理を理解することが重要である、従来の手術術式を知り、新しい術式の原理を知る、これが原点である、と。この考え方は、極めて当然のことのように聞こえるが、なかなか含蓄のある言葉として私に響いた。そこで彼の特別講演を聴き、彼が本当にまじめにこの術式を考え、しかも医学の歴史の1つの柱たりうる出来事であるとの自信を持ってこれにあたっていることがよく理解された。

今般発刊された Karl A. Zucker

編集の「Surgical Laparoscopy」の日本語訳「スタンダードテキスト 腹腔鏡下外科手術」を拝見して、まず私の目に飛び込んだのは、編者 Zucker の序にある次の一節である。“腹腔鏡下外科手術が、抗生物質の発見、輸血、麻酔法の発達などと同様の意義を持つ歴史的出来事のひとつとして加えられるのは間違いない…”とある文章で、彼自身の大変な自信と、この術式に対する絶大な想い入れとを感ぜずにはいられない。

著者は、Zucker（メリーランド大学外科）をはじめ、Mouiel（ニース大学外科）、Reddick（ナッシュビル・ウエストサイド病院外科）、Cooperman（ニューヨーク医科大学外科）、Warshaw（ハーバード大学 M.G.H. 病院外科）らと、その道の第一線の達人が顔を揃えている。

胆嚢摘出術をはじめ、虫垂切除術、骨盤内リンパ節切除、選択的迷走神経切離術、鼠径ヘルニア手術、腸管手術などの各論では、カラー図譜を取り入れ、術式をわかりやすく解説

しており、まさにスタンダードテキストである。現在の日本で、この領域の発展は着実な歩みを進めている。ここで、必要な知識としての合併症、そしてまずスタートの時点で、しっかりとした基盤作りが大切なことから、トレーニングと資格認定とに関する記載も大変参考になる。特にレジデントに対するトレーニングに関しては、もはや胆嚢摘出術の80～85%を腹腔鏡下手術で行うようになった私たちの大学でも必須の課題となっている。折しも、今回の翻訳による本書出版は、以上の必然性と十分対応しうる点で時宜を得たものと考えられる。

最後に、本書123ページにあるメリーランド大学における「手術承諾書」は、臨床応用に際して必要なサンプルとして、各施設でも是非とも役立たせていただきたいものである。

● B5 328頁 図88 写真83
原色図79 1993 定価18,540円
(税込) 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)